Osaka Shoin Women's University Repository

徒然草における「なまめかし」について

北村英子

鎌倉末期の作品として、格調の高い「徒然草」は、吉田兼好が王朝文学の名作「枕冊子」を強く意識して書いたものである。そして、「枕冊子」と「徒然草」は我国随筆界の双璧とまでいわれているのである。

しかし、「徒然草」の内容は仏教的無常観から人生・世相を捕らえ、その背景に王朝時代の美意識を取り入れて描いたものである。

本稿においてはその王朝時代の美意識の中でも、当時全盛を極めていた美「なまめく」「なまめかし」についてどれ程「徒然草」中に継承されているかを検討してみたい。

「徒然草」は序段と二百四十三段の章段からなるが、そのうち「なまめく」「なまめかし」の美的語詞が見られるのは次の六個所である。

(1)いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり、たゞ人も、舎人など給はるきははゆゝしと見ゆ。その子・孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

（第一段・形容詞・終止形）

(2)神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ。おほかた、ものの音には、笛・篳篥。常に聞(き)たきは、琵琶・和琴。

（第十六段・形容詞・連用形）

(3)「灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の戀しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく比、早苗とるころ、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白（く）見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月

Osaka Shoin Women's University Repository

祓またをかし。七月まつるこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじとにもあらず。

（第十九段・形容詞・已然形）

(4)斎王の野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事のかぎりとは覺えしか。「經」・「佛」など忌みて、「なかご」、「染紙」などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣しわたして、榊木に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮。

（第二十四段・形容詞・連体形）

(5)下部に酒飲ませる事は、心すべきことなり。宇治に住(み)侍(り)けるをのこ、京に、具覺房とて、なまめきたる遁世の僧を、こじうとなりければ、常に申(し)睦びけり。或時、迎(へ)に馬を遣したりければ、「遙なるほどなり。口づきのをのこに、先一度せさせよ」とて、酒を出したれば、さしうけ〳〵、よゝと飲(み)ぬ。

（第八十七段・動詞・連用形）

(6)都の人のゆゝしげなるは、睡(り)て、いとも見ず。若く末々なるは、宮仕へに立ち居、人の後にさぶらふは、様あしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明(け)はなれぬほど、忍びて寄する車どもの床しきを、それか、かれかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きら〳〵しくも、さま〴〵に行(き)交ふ、見るもつれ〴〵ならず。

（第百三十七段・形容詞・連体形）

以上のとおり六例中、形容詞の連用形が一例、終止形が一例、連体形が二例、已然形が一例、計五例を示し、動詞は連用形が一例のみ見当たるのである。ちなみに、「徒然草」の作者、吉田兼好が意識して書いたという「枕冊子」と品詞・活用形を次に表示して、その影響を見てみたい。

作品名		徒然草
形容詞	未然形	
	連用形 音便形	1
	終止形	1
	連体形	2
	已然形	1
	命令形	
動詞	未然形	
	連用形	1
	終止形	
	連体形	
	已然形	
	命令形	
計		6

Osaka Shoin Women's University Repository

枕冊子	
4	
4	
3	
5	
16	

「徒然草」は量的には「枕冊子」のおよそ三分の二を示すのである。その作品中に六個所にわたって「なまめく」「なまめかし」美が採択されているのであるから、兼好法師はよほどその美にあこがれをもち重要な美として尊重していたにちがいない。では、その「なまめく」「なまめかし」について、前に示した表から検討すると、形容詞においては、両作品とも、連用形・終止形・連体形が使用されているのは共通するところであるが、「徒然草」においてはこの他、已然形がただの一例のみ使用されている。動詞においては両作品とも、連用形のみの活用形が使用されているだけで、他の活用形は全然使用されていない。すなわち、品詞・活用形においては両作品とも、ほとんど同形のものが使用されている事に気付くであろう。

次に前に示した用例(1)から(6)までの「徒然草」における「なまめく」「なまめかし」における対象を検討してみることにする。

(1)第一段―〔御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり、たゞ人も、舎人など給はるきははゆゝしと見ゆ。その子・孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。〕

ここにおいては、帝・摂政・関白・貴族達の身分の子や孫は、たとえおちぶれてしまっていても、「なまめかし」といっており、ここでは明らかに身分の高い人の子や孫を「なまめかし」と称えているのである。何となく上品さを漂わす人物をその対象に取り上げているのである。

(2)第十六段―〔神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ。おほかた、ものの音には、笛・篳篥。常に聞（き）たきは、琵琶・和琴。〕

ここでは神楽という行事を、「なまめかしく、おもしろけれ」と称えているのである。神楽というのは「日本古典文学大系」の注に次のようにある。

○大嘗会、および、毎年十二月に、宮中内侍所で行われた神楽。

季節は十二月である。内侍所の庭前で行われた神楽に、作者兼好法師は「なまめかし」ものを覚えるのである。特に楽器の笛・篳篥・琵琶・和琴の音に魅いるのである。この他、王朝文学作品に神楽・大嘗会の行事に関する情景の中で「なまめかし」と称えているものに次のような個所がある。

○御神楽の夜に成ぬれは事のさま内侍所のみかくらにたかふ事なしこれは今すこしいまめかしくみゆるみな人たちをみのすかたにてあかひもかけ日蔭のいとなどなまめかしく見ゆるにかさしのはなの有さま見る臨時の祭みる心ちする。（「讃岐典

Osaka Shoin Women's University Repository

侍日記」）

○大賞會、例の月日の山引き、あやしの者まで青摺に赤紐なまめかしうて、急ぎあゆみ、倒れぬべく悪しき道をつづきたちて行くもをかし、さるべき人はあゆまで、人より後までかしづかれ、ふとりたる近江守などは、人に押されなどして歩み行くもをかしくなん。なほなべての事にはあらず。今年は五節舞ふ人は、皆爵など賜はる。（「栄花物語」）

また、神楽・大嘗会の神事に関係のある五節について「枕冊子」の「なまめかしきもの」中において特に取り上げているのは注目したい。

○紫の紙を包み文にて、ふさ長き藤につけたる。小忌の君達も、いとなまめかし。（八十五段）

続いて五節に関する場面が「なまめかしきもの」の一節として八十六段・八十七段へと連なっている中に、

○赤紐をかしうむすび下げて、いみじうやうしたる白き衣、かた木のかたは繪にかきたり。織物の唐衣どもの上に着たるはまことにめづらしきなかに、童はまいていますこしなまめきたり。（八十六段）

○細太刀に平緒つけて、清げなる男の持てわたるもなまめかし。（八十七段）

とあるが、今ここに検討してきた王朝文学作品、「讃岐典侍日記」・「栄花物語」・「枕冊子」における神楽・大嘗会・五節の神事の場面に関する「なまめかし」はいずれも、人物や人物が身につけている衣裳または、衣裳の類を捕捉しているのである。

さて、「徒然草」においても王朝文学作品に表白されていた神楽を「なまめかし」と讃美し、その影響のあることが知れたところであるが、同じ神事に関する神楽・大嘗会・五節に対しても「なまめかし」美を感得する対象が異なる。「讃岐典侍日記」・「栄花物語」・「枕冊子」においては人物・衣裳または衣裳の類を「なまめかし」と讃美し、「徒然草」においては楽器の音を「なまめかし」と讃美しているのである。その理由を考察すると、時代的背景からくる「なまめかし」の捕捉の仕方の相違があるかも知れない。しかし、わたくしはそれよりも、もっとその作品の作者が女性であるか男性であるかを問題にして論を進めたい。「讃岐典侍日記」の作者は藤原長子という女性であるし、「栄花物語」の作者は異説があるといえども赤染衛門の作とする説が有力であるし、そうでなくても、赤染衛門が関係していたことは確かであると考えれば、この「栄花物語」も女性の作である。「枕冊子」はもちろん、清少納言という女性の執筆とされている。このように考察してくると、「讃岐典侍日記」も「栄花物語」も「枕冊子」も偶然ながら三作品とも女性の作である。女性はいつの時代も変らぬ人物または人物に身につける衣裳や、その類が直接的に目に映えるのである。

一方、「徒然草」の作者は周知のとおり兼好法師という男性である。前述したとおり、兼好法師は神楽の情景の中で特に楽器の音を「なまめかし」と感じ取っているのである。女性の作

Osaka Shoin Women's University Repository

品は「なまめかし」を視覚美として捕捉し、男性の作品である「徒然草」においては「なまめかし」を聴覚的なものとして捕捉していることが知れたのである。

(3)第十九段―〔五月、あやめふく比、早苗とるころ、水鶏のたゝくなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白(く)見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。〕

この段は季節の推移の情趣深さを記した章段である。

○六月の比、あやしき家に夕顔の白(く)見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。

と「あはれ」の語で作者の感覚を呈し、

○六月祓またをかし

と「をかし」で表現し、また、

○野分の朝こそをかしけれ

と「をかし」を用い、作者はそれぞれの季節感を各々「あはれ」「をかし」の語で表現している中に、七月七日に七夕を祭るのはまことに「なまめかしけれ」とわざわざ作者は七月の七夕を祭ることを「なまめかし」と観取しているのである。この十九段において前述した他に、季節の特徴を「あはれ」「をかし」の語で表現している個所に次のような文面がまだある。

○もののあはれは秋こそまされ

○灌佛の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の戀しさもまされ

○さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおける朝、遣水より烟の立つこそをかしけれ

○年の暮(れ)はてて、人ごとに急ぎあへる比ぞ、またなくあはれなる

○御佛名・荷前の使立つなどぞ、哀にやんごとなき

○亡き人のくる夜とて玉まつるわざは、この比都にはなきを、東のかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか

○大路のさま、松立(て)わたして、花やかにうれしげなることそ、またあはれなれ

このように「徒然草」の作者、兼好法師は季節の推移を「あはれ」または「をかし」と感得しているのであるが、その中でも七月の七夕を祭ることのみ「なまめかし」と感得している。よほど作者は七夕を祭ることを「なまめかし」と強く意識していたにちがいない。

(4)第二十四段―〔斎王の野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事のかぎりとは覺えしか。「經」・「佛」など忌みて、「なかご」、染紙」などいふなるもをかし。すべて

Osaka Shoin Women's University Repository

神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。〕

作者兼好は周知のとおり僧形者である。仏道の人であっても神社を見て祈願をこめた「あこがれ」の心を惹起し信仰心から心静かに神社を「なまめかしきもの」として讃美しているのである。法師らしく澄んだまなざしで捕らえた美である。

(5)第八十七段―〔下部に酒飲まする事は、心すべきことなり。宇治に住み侍りけるをのこ、京に、具覚房とて、なまめきたる遁世の僧を、こじうとなりければ、常に申し睦びけり。〕

ここにおける「なまめく」美の対象は人物である。作者兼好と同じ僧形の身である具覚房という俗世間を遁れた僧を捕捉しているのである。作者はわざわざ本文に「遁世の僧」と断わっているところから考察すれば、俗世間に染まり心を汚した人物を忌避し、俗世間を遁れた心清らかな人物に好感をよせているのである。これも(4)第二十四段で述べたと同じく作者が法師らしく澄んだまなざしで捕らえた美である。であるから、ここに見られる「なまめく」美は平安女流作品に見られた人物が目に映えるような色彩豊かな衣裳などを称えた視覚美でなく、身体の内面からにじみ出るようなしっとりとした美である。作者自身仏道に仕える僧形者であるから、視覚的に目に映える美より、心澄みゆく時にじっくり見つめることによって心魂を静かに揺り動かす美を作者は求めているのである。であるから、派手な美よりも、地味で上品な美を好んでいるのである。

(6)第百三十七段―〔都の人のゆゝしげなるは、睡りて、いとも見ず。若く末々なるは、宮仕へに立ち居、人の後にさぶらふは、様あしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明け(け)はなれぬほど、忍びて寄する車どもの床しきを、それか、かれかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。〕

賀茂祭を取り扱った場面である。あれにもこれにも葵をかけている情景を「なまめかし」と讃美しているのである。平安朝の文学作品においても、賀茂祭を「なまめかし」と讃美しているものに次の作品がある。

○祭の日はうらうへの色なり。濃き二人・薄き二人、やがて同じ色の表著・唐衣なり。紅の濃き薄き、紫・山吹・青き・蘇芳など、皆二人づつなり。かへさには村濃にて、袴・表著も、裳・唐衣も羅にて、文にはかねをし縫物どもをし、心々に繪などかきたれば、すずしげになまめかしうをかし。上達部も、殿類通・内の大殿教通をはじめ奉りておはしませば、いみじうめでたし。上達部・殿上人殘るなし。日ごとにいみじき見物にてなんありける。

(「栄花物語」・殿上の花見)

Osaka Shoin Women's University Repository

○南ヲ見レバ、賀茂ノ祭ノ物見車、返サノ紫野ノ生メカ、神館ニ郭公ノ眠タ氣ニ鳴キ、花橘ニ付ル心バヘナ有メリ。
（「今昔物語」・巻第十九東三条内神報僧恩語第卅三）

このように「栄花物語」「今昔物語」に賀茂祭を取り扱い、その個所で「なまめかし」の美意識が見られる。同じ賀茂祭を扱った個所であるが「栄花物語」の方の「なまめかし」は衣裳、またはそれに関した色彩・模様を捕捉している。ここにおいてもやはり女性らしい感覚から「なまめかし」美を捕らえているのである。

一方、「今昔物語」の作者（撰者）は未詳であるといえども男性であることは動し難いし、執筆者または編集者のほとんどが「徒然草」の作者と同じ僧俗であることは異論がない。この男性の筆(編)による「今昔物語」において「なまめかし」の用語はただの二語しか使用されていなかった。（拙著「なまめかし」九十頁に既発表）その二語の中、一語がこの賀茂祭の個所にある。すなわち、僧が神に決してのぞいてはいけないといわれていた室内をのぞくと、東南西北の順に年中行事が展開さており、その南の方に、賀茂祭の物見車が、帰途紫野あたりを行く情景を「なまめかし」と捕らえているのである。

さて、「徒然草」のこの第百三十七段においても、賀茂祭の日、あれにもこれにも葵をかけわたしているのが「なまめかし」と、賀茂祭の情景を讃美しているのである。このように検討してみると、「今昔物語」と「徒然草」の作者は、確実に男性であるし、「徒然草」の作者は僧俗である。「今昔物語」の作者（編者）も主体が僧俗であると考えている。そして、また、この「今昔物語」における「東三条内神報僧恩語第三十三」の本文において、

「……西ノ洞院ヨリハ西ニ、西ノ洞院面ニ住ム僧有ケリ。糸貴キ者ニハ非ザリケレドモ、常ニ法華經仁王經ナドヲ讀奉ケルニ、東三條ノ戌亥ノ角ニ御スル神ノ、木村ノ筋向ニ見エ渡リケレバ、經ヲ讀奉テハ、常ニ此ノ神ニ法樂ヲ奉テ過ケル程ニ、夕暮方ニ、此ノ僧半蔀ニ立テ、見出シテ經ヲ讀テ有ケルニ、……」

とあるように、「僧」や「神」が登場しており、いかにも僧らしい筆致をみせているのである。であるから、「徒然草」の第百三十七段の賀茂祭を扱った個所での「なまめかし」の用法と、「今昔物語」の「巻第十九—第三十三」話の賀茂祭を扱った個所での「なまめかし」の用法は、どちらも賀茂祭の佳景に視線が向けられている点に類似性が認められるのである。また、時代的な距離から考察しても、前に示した「栄花物語」よりはより「今昔物語」の方が「徒然草」の成立年代と近いこともあって「今昔物語」と「徒然草」の「なまめかし」の対象の捕捉の仕方が相似を示す一要素ともなっているのである。このように「栄花物語」「今昔物語」「徒然草」における賀茂祭の個所での「なまめかし」美の捕らえ方は、女性の作品であるか

Osaka Shoin Women's University Repository

男性の作品であるかによってその感得する対象が相違する。したがって、女性の作か男性の作かによって「なまめかし」の対象の捕らえ方が違う。これが何よりの要因になっていると思うし、成立年代もその一要素になっていると考えられる。すなわち、王朝文学作品である「栄花物語」では人物を主体として「なまめかし」美を捕らえているが、「今昔物語」や「徒然草」の時代になると、それから派生した美の捕らえ方、すなわち、情景・風情などにまで「なまめかし」美の捕らえ方をしていることが知れたところである。

さて、このように「徒然草」における「なまめかし」美の対象を個々に検討してきたのであるが、では「徒然草」における「なまめく」「なまめかし」美の特徴を総体的に把握し、まとめとする。

「徒然草」における「なまめく」「なまめかし」は、ここで検討してきたとおり、(1)第一段—身分の高い人の子や孫(2)第十六段—神楽(3)第十九段—七夕をまつる(4)第二十四段—神社(5)第八十七段—具覚房(6)第百三十七段—(賀茂祭の日)あれにもこれにも葵をかけている情景に「なまめく」「なまめかし」美の対象が求められていたのであるが、この六例中二例が人物であり、四例が事物である。王朝文学作品を今まで調査してきた結果(拙著「なまめかし」)、その美は「なまめく」という動詞形で「伊勢物語」から明確に生まれ、そして、後の王朝文学美の最高美として育ったのであるが、その時代の「なまめく」「なまめかし」美は基本的には女性に対して用いられた人物美であったと考えてきた。しかし、この「徒然草」における対象を検討してみると、人物より事物にその対象を求めている方が多くなる。時代が下るこの作品において、人物美から転化した事物美の方に焦点が向けられてきているのである。そして、王朝女流作品に多く見られた華麗な視覚美よりも、地味で時間をかけることによってじわじわと内面から涌き出るような上品な美を重視しているのである。これは「徒然草」の作者、兼好法師という男性の筆による作品であるから地味な美を好んだことも首肯出来るのである。また、この「徒然草」の「なまめく」「なまめかし」の対象の捕らえ方を一貫して考察した時、いかにも僧侶らしい立場から澄みゆく心でもってその美を凝視しているのである。人物においても俗世間から遁れた僧侶を描き出し、事物においても神楽・七夕まつること・神社・賀茂祭の日にあれにもこれにも葵をかけている情景と、どれもこれも神仏に関するものばかりに「なまめく」「なまめかし」美が求められているのである。人物においては僧侶という仏道の人を描き、事物においては神に関するもの、またはその行事を描いていることは注目に値する。これは作者が神道の家に生まれた関係から神について関心をもっていたにちがいないと思われる。ここに「徒然草」の著者の人間性なり信仰思想なりが、「なまめく」「なまめかし」美の捕捉にも影響しているのである。であるから、「徒然草」の作者は僧侶といえ神道・仏道にあこがれ神聖なものを絶対視し、それを「なまめかし」美で端的に捕らえているのである。「日本古典文学大系」に「つれ〴〵草を執筆している兼好は、仏道からも解放された立場でものをいっている」とあるが、

Osaka Shoin Women's University Repository

わたくしはここで、「なまめく」「なまめかし」の一語から考察した時、その美の対象の捕らえ方は、まだまだ仏道から解放されない立場で美を凝視していると思うのである。「徒然草」の作品の中には、いろいろな俗事を書き、女のことも書き、多くの読者に親しまれるように書いた部分もあろうが、ここに検討を加えて「なまめく」「なまめかし」美の対象をみた時、一般の俗人が関心を寄せないもの、すなわち、神仏に関するものばかりに「なまめく」「なまめかし」美の視線を寄せていることは、必らず、信仰心に厚い人でなければこのような結果が出ないと思うのである。「なまめく」「なまめかし」美の捕捉の仕方は仏道からぬけ切れない立場で、心に映りゆくままの美意識で「徒然草」の作品中に取り入れられているのである。

「徒然草」は「枕冊子」を意識して書いた作品であるが形式的には似ているといえども、この「なまめく」「なまめかし」美の対象の捕らえ方はあまり類似性を見せない。「徒然草」においてはここで考察してきたとおり、男性で法師である作品から、兼好的な個性が濃厚に出ているが、一方「枕冊子」は女性の作品であるから、その対象の取り上げ方がきわめて女性的である。やはり、男性の作品と女性の作品においては「なまめく」「なまめかし」美の対象を感得するものが違うのである。けれども、兼好法師は「枕冊子」や「源氏物語」の平安朝作品に重要な位置を占めていた「なまめく」「なまめかし」美を、「あこがれ」のまなこでもって、この「徒然草」に好んで採択した傾向が認められる。

最後に考察を加味しておきたい事がある。「徒然草」の成立年代からちょうど百年前に成立していた同じ随筆集「方丈記」について、「なまめく」「なまめかし」美を調査した結果皆無であった。「方丈記」は作者鴨長明の経験を基調として書かれたものである。特に、天変地異―大火・大風・遷都・飢饉・大地震が素材になっており、また、このような苦しい生活から、仏教的無常観にすがって生き抜こうとした作者の精神が伺われる作品である。このような社会変動の激しい様子を描いた作品だけに、「なまめく」「なまめかし」美は表われにくいと考えられるし、作者自身、いちじるしく変動する天変地異の渦中で生き抜いたため、「なまめく」「なまめかし」という優美を主潮とした美にあこがれる心の余裕がなかったものと考えられる。

「徒然草」においても「方丈記」においても、無常観を包括した随筆集であるが、「徒然草」の方は前に検討してきたとおり、その美を採択しているが、「方丈記」の方は皆無である。「徒然草」の作者兼好法師は時代の近い「方丈記」を興味深く耽読していたにちがいないが、より遠い「枕冊子」の方に心ひかれ、王朝美である「なまめく」「なまめかし」美を継承しているのである。

○テキストは西尾実校注「方丈記・徒然草」(岩波書店刊、日本古典大系)を使用した。